

# The Development of Resources for Japanese Studies: from Kokugaku to Japanology

日本研究資料の歩み：国学から日本学へ

Noboru Koyama





**EAJRS**  
**(European Association of**  
**Japanese Resource**  
**Specialists)**

“Japanese Resources”



“Resources for Japanese Studies”

# What are the resources for Japanese Studies?

- Books (図書) including 和漢古書・写本
- Periodicals (雑誌)
- Records・Documents (文書・記録)
- E-Resources(電子資料)
- Art Works, Antiques (美術品、骨董品)
- Photographs (写真)
- Others (その他)

# JAPANESE STUDIES

## (日本研究)

国学  
(**National Learning**)



日本学  
(**Japanology**)



日本研究  
(**Japanese Studies**)

# What is Kokugaku (国学)?

## National Learning (Native Studies)

### 書籍 (resources) で分類

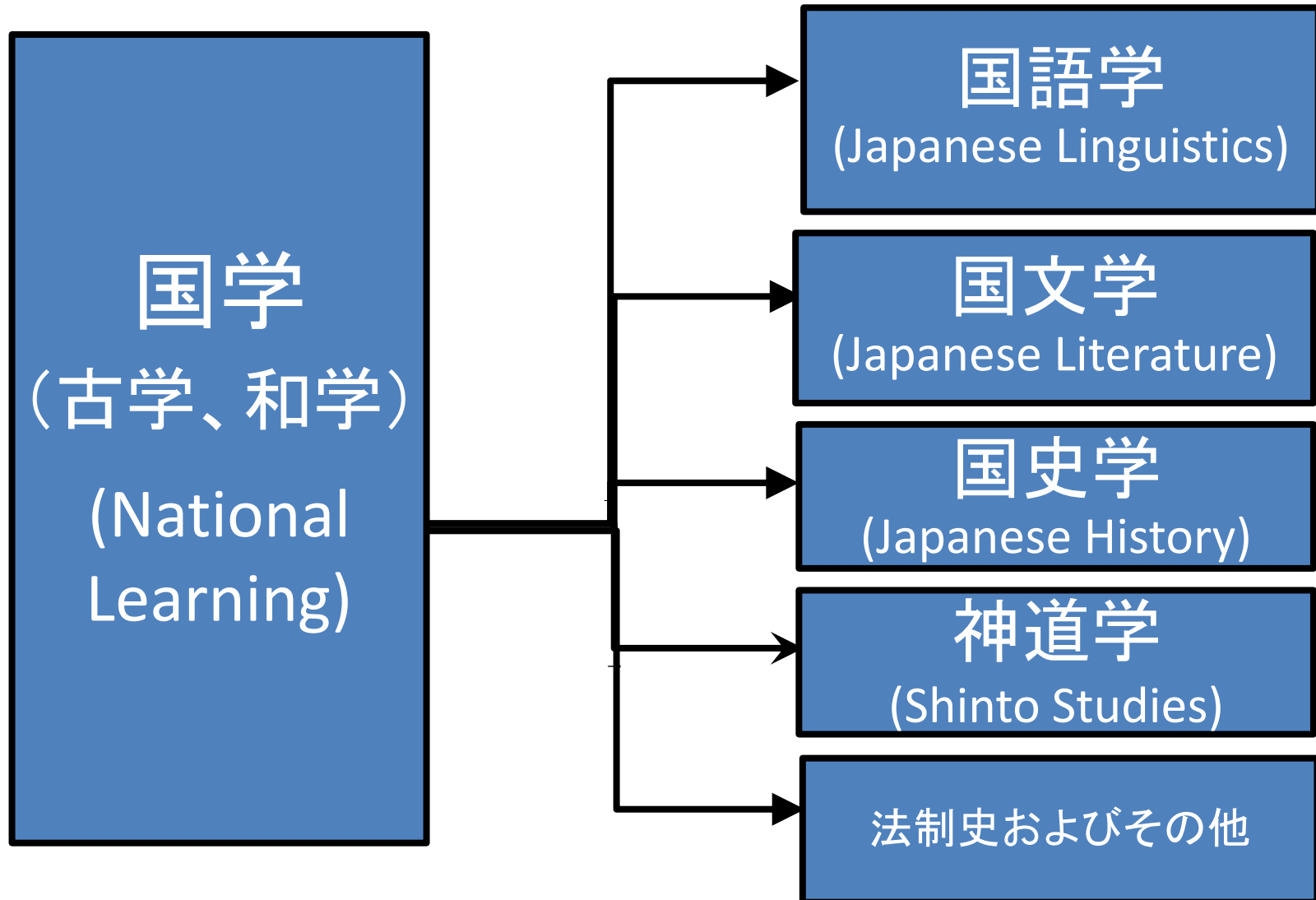
- 和書：“国学”（古学、和学）
- 漢籍：漢学
- (仏書)
- 蘭書：蘭学（洋書：洋学）

### 宗教 (religions)

- \* 神道：“国学”
- \* 儒教：儒学
- \* 仏教：仏教学

# 近代以降の展開

(Development during the Meiji period)



# The Transition Period in Japanese Studies (Edo period and Early Meiji period)

初期ドイツ派

Early German School

ケンペル  
(**Kaempfer**)

ツンベルグ  
(**Thunberg**)

シーボルト  
(**Siebold**)



英国派

English School

サトウ  
(**Satow**)

アストン  
(**Aston**)

チェンバレン  
(**Chamberlain**)

**英国派(サトウ、アストン、チェンバレン)と初期ドイツ派(シーボルトなど)との違い？**

**What is the main difference between the English School and the Early German School?**

**日本の原典を厳しい批判のもとにさらす言語能力**

**Japanese language ability**

**“日本語読解能力の有無”**

**サトウ、アストン、チェンバレンたちは自分自身で日本語読解能力を獲得し、日本の文献を自由に利用し、本格的な日本研究を開始した。**



# ケンブリッジ大学図書館日本語コレクション

**Cambridge University Library Japanese Collection**

(RESOURCES FOR JAPANESE STUDIES)

- **Early Japanese Books (Aston, Satow and Von Siebold Collections) (1911-1913)**
- **Modern Collections (Books and Periodicals)**  
(図書・雑誌)  
(第二次世界大戦後以降)(After WWII)
- **E-Resources (電子資料)(Internet時代)**

# Aston, Satow and Von Siebold Collections

林 望、ピーター・コーニツキー共編『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録: アストン・サトウ・シーボルト・コレクション』

**”Early Japanese Books in Cambridge University Library: a Catalogue of the Aston, Satow, and von Siebold Collections”**

書籍点数 (titles): 2,474点

**\* 1911:**

**Siebold:** 721 volumes (冊)

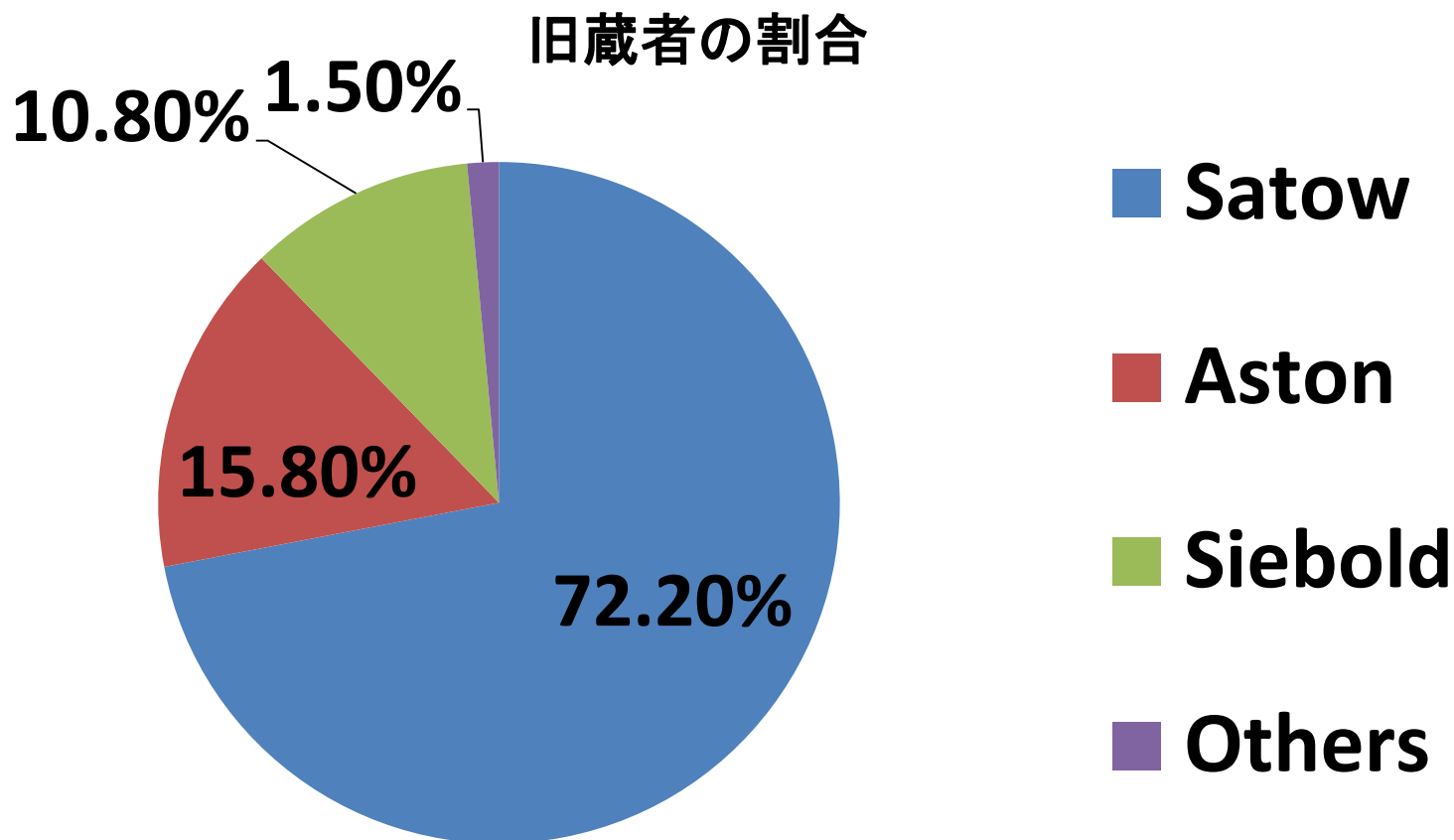
**Aston:** 1,900 works(点) 9,500 volumes(冊)

(82 % from **Satow**)

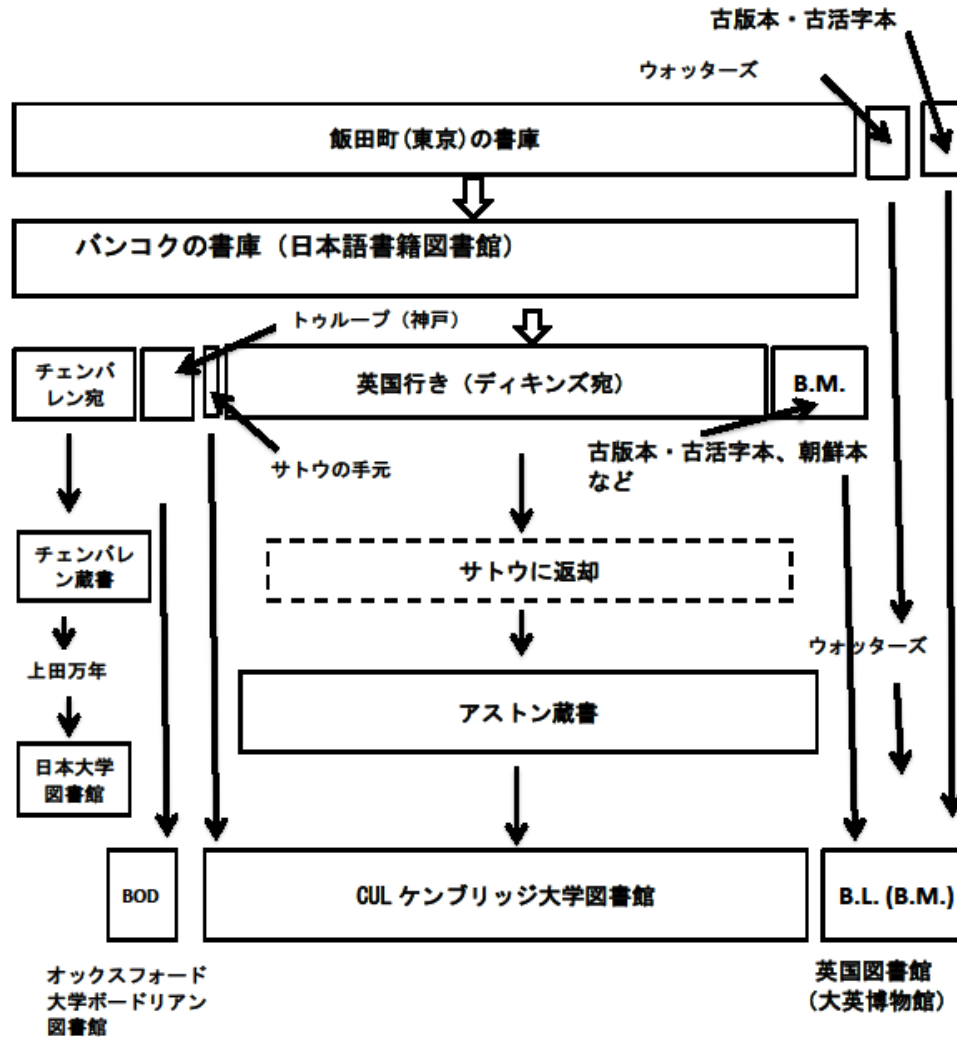
**\* 1912-13:**

**Satow:** 433 volumes(冊)

# Aston, Satow and Von Siebold Collectionsの旧蔵者の割合 “概算”(書籍点数)



## サトウ蔵書の行方（概略）



## The Dispersal of Satow's Japanese Collection

# Heinrich Philipp von Siebold Collection ハインリッヒ・シーボルト・コレクション

- **721 volumes (冊) 書籍点数は”265” (titles) ?**  
(『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録:アストン・サトウ・シーボルト・コレクション』)
- 視覚に訴えるものが多い(地図、絵本、図録,etc.)  
(The majority of the items have a visual appeal.)
- ハインリッヒ(小シーボルト)は日本語を上手に話したが、日本語が読めなかった。彼は漢字を学ばなかった。  
(He never learnt “Kanji” Chinese characters.)
- 日本学者としては父(大シーボルト)に近い。  
(Heinrich resembled his father as a Japanese scholar.)

## C.U.L.におけるサトウとアストンのコレクション

- 複本が多い(ざっと数えただけでも256セットにおよぶ。
- もともとサトウの蔵書に複本が多い(サトウの収集方法を反映か)。
- サトウとアストンの蔵書間の複本で目に付くのは神道・国学関係の複本。
- サトウの神道・国学関係の書籍はチェンバレンにも贈呈されていた。

# サトウとアストン旧蔵書間の複本 神道・国学関係

## 平田篤胤著

- ・ 『たまたすき』(『玉櫛』) **10**巻
- ・ 『古史成文』 **10**巻
- ・ 『古史伝』 **29**巻
- ・ 『古道大意』 **2**巻
- ・ 『俗神道大意』 **4**巻
- ・ 『鬼神新論』
- ・ 『神字日文伝』 **2**巻・附
- ・

## 本居宣長

- ・ 『古事記伝』 **44**巻
- ・ 『玉かつま』 **14**巻・目録**1**巻
- ・ 『玉あられ』
- ・ 『字御仮字用格』
- ・ 『大祓詞後釈』 **2**巻
- ・ 『神代紀髻華山蔭』

## 賀茂真淵

- ・ 『冠辞考』 **10**巻
- ・ 『伊勢物語古意』 **6**巻

## 谷川土清

- ・ 『日本書紀通証』 **35**巻

## 本居春庭

- ・ 『詞八衢』 **2**巻

## 富士谷成章

- ・ 『かさし抄』 **3**巻

## 上田秋成

- ・ 『冠辞続貂』 **7**巻

## 新井白石

- ・ 『五事略』

## 加藤千蔭

- ・ 『万葉集略解』 **20**巻

## 河村秀根

- ・ 『書紀集解』 **30**巻

## 林鷲峰

- ・ 『日本王代一覽』
- 

- ・ 『古事記』 **3**巻

- ・ 『日本書紀』 **30**巻

- ・ 『延喜式』 **50**巻

- ・ 『新撰姓氏録』 **3**巻





## サトウの神道・国学研究

- 1874:** ‘The Shintô Temple of Isé’ (伊勢神宮)
- 1875:** ‘The Revival of Pure Shintô’ (古神道の復活)
- 1878:** ‘The Mythology and Religious Worship of the Ancient Japanese’ (古代日本の神話と宗教的祭祀)
- 1879-81:** ‘Ancient Japanese Rituals’ Part I-III (古代日本日本の祭式) (祝詞の解説と英訳)

# チェンバレンとアストンの神道・国学研究

## \* Chamberlain

**1882:** *A Translation of the “Ko-ji-ki” or “Records of Ancient Matters”* (『古事記』の英訳)

## \* Aston

**1887:** ‘Early Japanese History’ (日本上古史)

**1896:** *Nihongi; Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D. 697* (『日本紀』の英訳)

(**1899:** *A History of Japanese Literature*) (『日本文学史』)

**1905:** *Shinto, the Way of the Gods* (『神道』)

## アストン・サトウ蔵書の経緯

- **1885(明治18)**: サトウ、蔵書処分を始める。チェンバレンにも国学・神道関係を含めた書籍を送付。
- **1888(明治21)**: アストン、離日(国学・神道関係を含めた書籍を英国に送付): 『日本書紀』の英訳など神道・国学研究を英国で継続する予定だったのか。
- **1892(明治25)**: サトウの蔵書、アストンに譲渡(アストンとサトウの蔵書が合体)。国学・神道関係の複本が発生。
- **1896(明治29)**: アストン、英訳『日本紀』を刊行。
- **1899(明治32)**: アストン、英文『日本文学史』を刊行。
- **1905(明治38)**: アストン、『神道』を刊行。
- **1911(明治44)**: アストンの蔵書をケンブリッジ大学図書館が購入。

## なぜ神道・国学関係で複本が出来たのか

アストンは『日本書籍』の英訳など神道・国学研究を英国で継続する予定であったので、それらの書籍がもともとアストンの蔵書に含まれていた。さらに神道・国学関係の書籍を多く含むサトウの蔵書が**1892(明治25)**年にアストンの蔵書に付け加わったので、ケンブリッジ大学図書館の和漢古書のコレクションには神道・国学関係で複本が多い。

# サトウの神道・国学関係者

(日記、書簡、著作などによる)

和田重雄(Wada Shigeo)

白石真道(Shiraishi Mamichi?): 甕栗、吉郎

白石千別(Shiraishi Chiwaki): 忠太夫、下総守、嶋岡、  
今様翁

林甕臣(Hayashi Mikaomi): 田口益城

鈴木真年(Suzuki Matoshi): 鈴木舎人、今井舎人

宮本小一(Miyamoto Koichi, or Miyamoto Okazu)

澤宣嘉(Sawa Nobuyoshi)

稲葉正邦(Inaba Masakuni)

堀秀成(Hori Hidenari)

## サトウの日本語教師・書道の先生・従者など (日記、書簡、著作などによる)

高岡要: サトウの日本語教師。紀州和歌山出身の医師。

中沢見作: サトウの日本語教師。唐津藩出身。

沼田寅三郎: 蜂須賀齊裕(阿波候)の家臣。

長沢: A・B・F・ミッドフォードの日本語教師。

林朴庵: ウィリアム・ウィリスの日本語教師・従者。

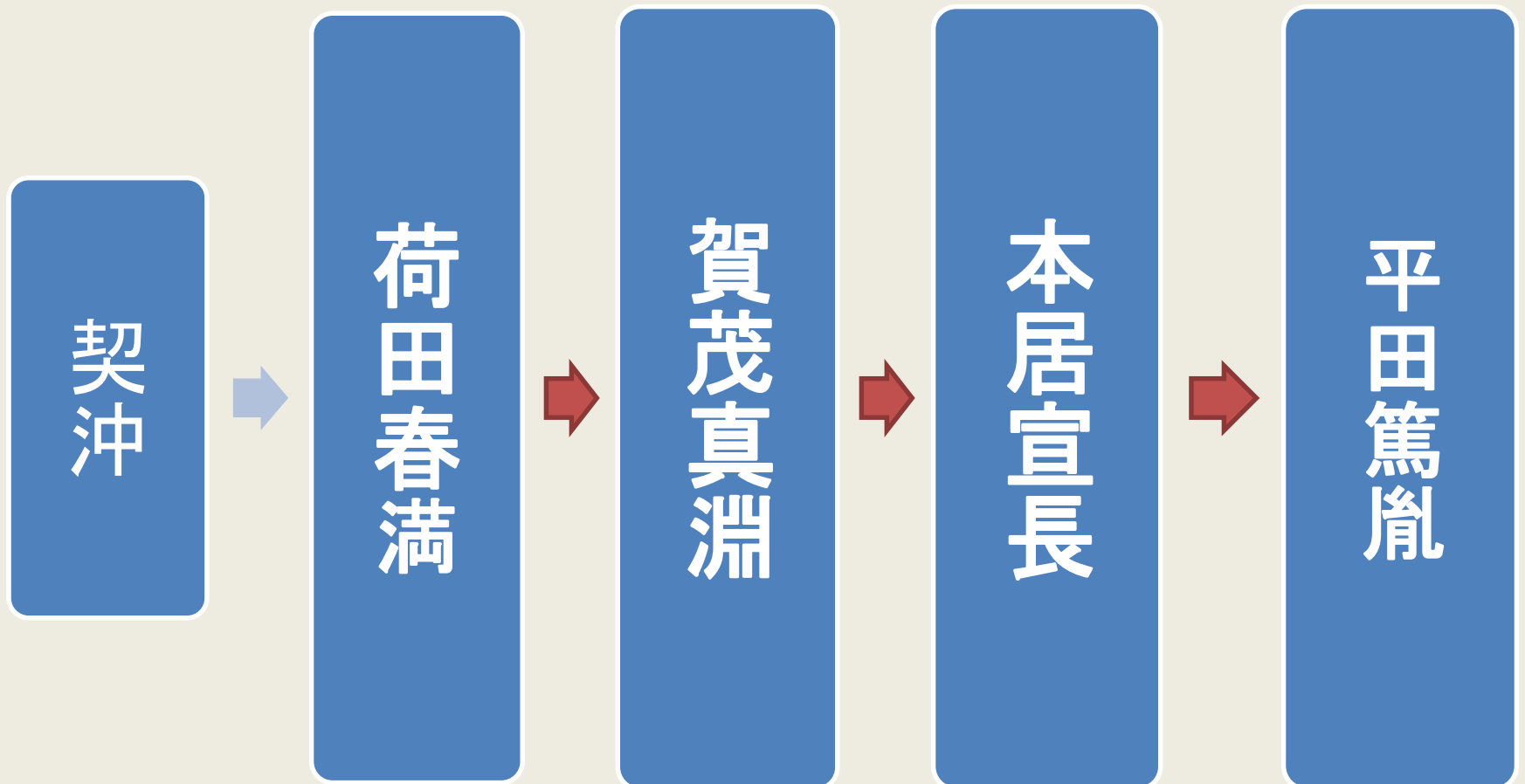
小野清五郎: 英国公使館の書記。

手塚タイスケ: 出石藩。サトウの習字の先生。

高斎単山: サトウの書道の先生。

野口富蔵: サトウの従者。会津藩出身。英国に留学。帰国後、兵庫県などに勤務。

# 国学の四大人 (Four Great Men of Kokugaku)



# Hirata School

気吹舎(伊吹酒舎)(いぶきのや)の門人



平田篤胤(ひらた・あつたね)(1776-1843)

平田鋈胤(ひらた・かねたね)(1779-1880) 養子

平田延胤(ひらた・のぶたね)(1828-1872) 孫

の  
門人



# 平田派(家)・気吹舎(いぶきのや)との関係

## ●気吹舎(いぶきのや)の門人

和田重雄: サトウの神道・国学の先生、樋口一葉の和歌の先生

白石真道: サトウの図書係、宮本小一の紹介で気吹舎の門人になる。

林甕臣: サトウの日本語の先生

鈴木真年: 系図学者

澤宣嘉: 尊皇攘夷派の公卿、初代外務卿

稲葉正邦: 老中、京都所司代、神道本局初代管長

## 平田派(家)・気吹舎(いぶきのや)との関係

### ●気吹舎(いぶきのや)の門人ではない

宮本小一：平田家の縁戚(母親が平田鍊胤のめい)、外務少丞、サトウに神道・国学関係者を紹介

白石千別：和学者、新潟奉行、白石真道の父

堀秀成：国学者、サトウやアストンに日本語学を教授

# サトウによる本格的な神道・国学の研究(学習)

- \* 1872(明治5): 外国人として初めて伊勢神宮参拝
- \* 1874(明治7): 'The Shintô Temple of Isé' (伊勢神宮)
- \* **1874(明治7)頃、和田重雄を先生として本格的な神道・国学の研究(学習)**
- \* 1875(明治8): 'The Revival of Pure Shintô' (古神道の復活)
- \* 1878(明治11): 'The Mythology and Religious Worship of the Ancient Japanese' (古代日本の神話と宗教的祭祀)
- \* 1879-81(明治12-14): 'Ancient Japanese Rituals' Part I-III (古代日本日本の祭式) (祝詞の解説と英訳)
- \* 1883(明治16)1月: 離日

# 平田篤胤の書籍

## 気吹舎(いぶきのや)の門人向けの著作

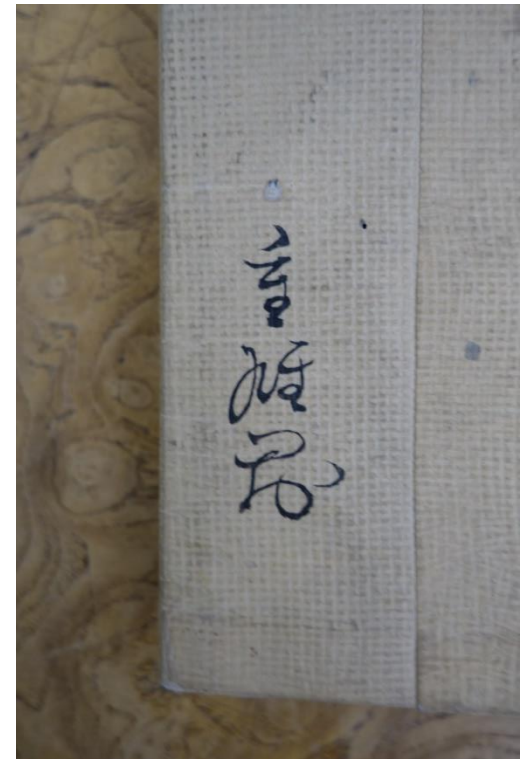
『毎朝神拝詞記』(最も読まれた著作、実践の書)

『玉擲』(『毎朝神拝詞記』の解説本)

『入学問答』(入門書)

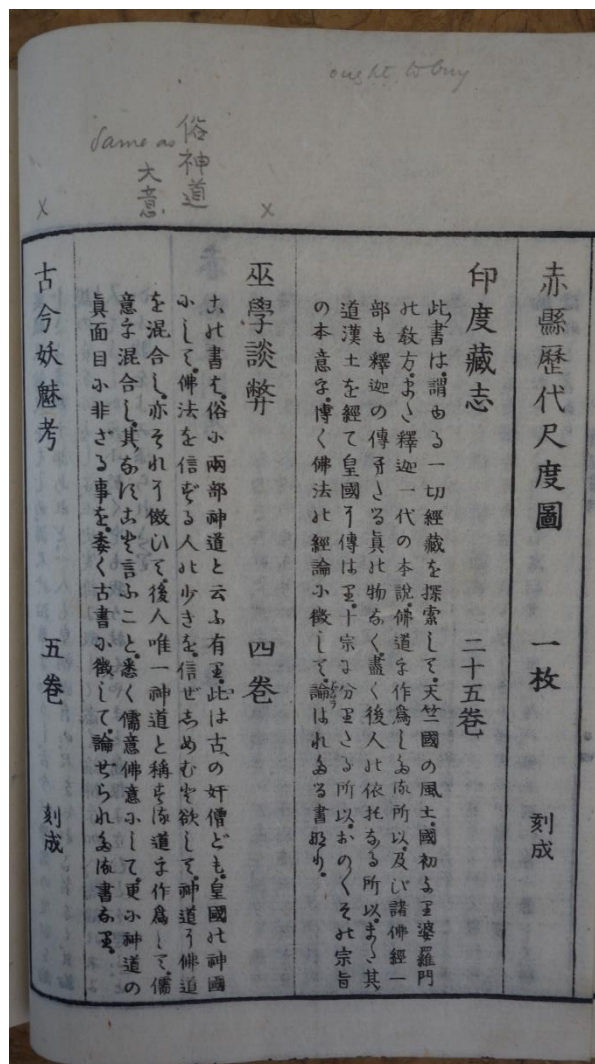
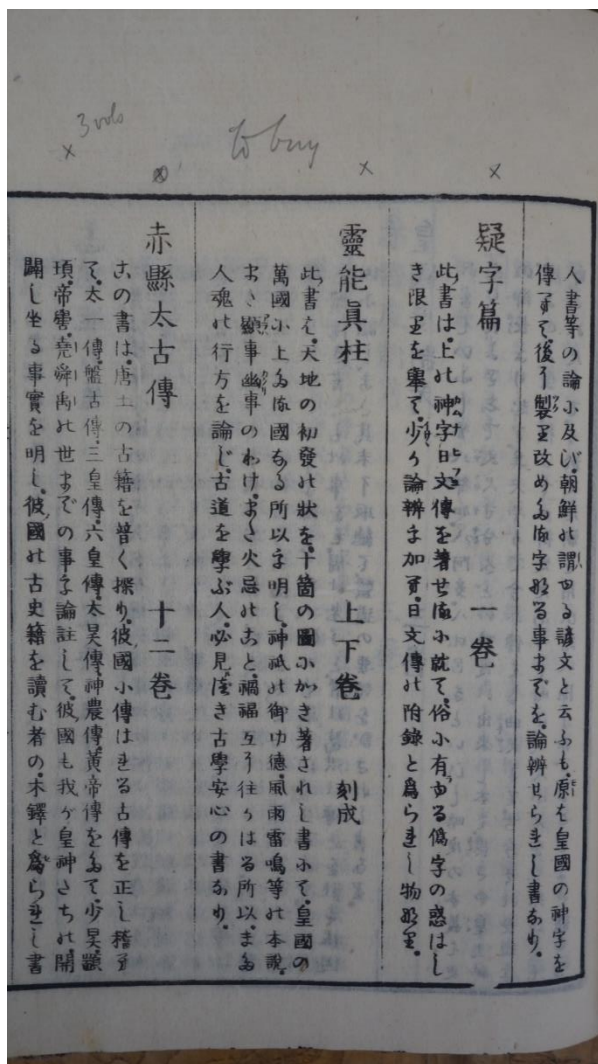
『大道惑問』の校訂者である碧川好尚(平田鋳胤の弟)は、初心者はず『玉匣』(たまくしげ)、『玉擲』、『古道大意』、『入学問答』などを読むべきであると薦めている。

# 『每朝神拜詞記』(和田重雄旧蔵)





# 『入学問答』「伊吹能舎先生著撰書目」(サトウの書込)



サトウの読書の仕方？  
朱点を付けて読書

(例)『靈能真柱』

朱点(サトウが最初に読んだ時不明な語に朱点を付け、後で先生に説明してもらったのか?)

靈能真柱上巻

平田篤胤著

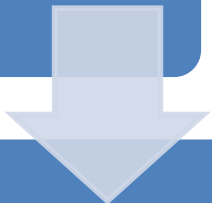
此乃築立る柱は、古學を依徒の大倭心ヲ鎮なり然るを  
 此柱乃固く底磐根尔築立て、引乃石ヲ堅固して、  
 也の言と言ひ、為と為故、言みさ、事尔さへ柱をく、  
 梁戸、牖の、錯鳴、動兒、引結、結る、葛目、緩び、取替、け、  
 噪き、夜目、乃、い、ま、さ、い、ま、さ、い、事、な、も、  
 出来、然、然、然、然、然、然、然、然、然、然、然、  
 潮沫、れ、成、ま、は、國、々、い、か、醜、目、穢、き、底、乃、國、方、  
 疎、び、来、し、説、尔、相、率、で、相、口、會、む、も、多、く、  
 見、る、  
 〇 灵乃こそし、  
 〇 一





# Aston's Japanese Studies (History and Shinto)

'Early Japanese History' (『日本  
上古史』) (T.A.S.J. 1889, Read in  
Japan in 1887)



*Nihongi* (『日本紀』) (1896,  
in Britain)



*Shinto* (『神道』) (1905, in  
Britain)

# 英国に戻ってからのアストンの日本研究 (Aston's Japanese Studies in Britain)

## **\*1896: 『日本紀』の英訳**

(日本にいる時からある程度計画していた?)

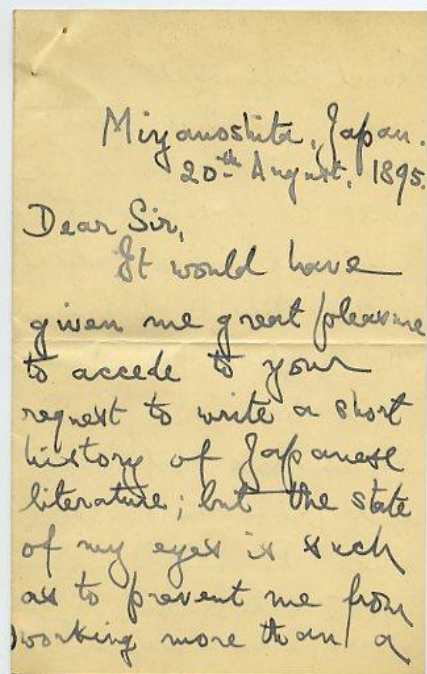
## **\*1899: 『日本文学史』**

(成り行きで執筆することになった)

## **\*1905: 『神道』**

(『日本紀』の英訳から発展した?)

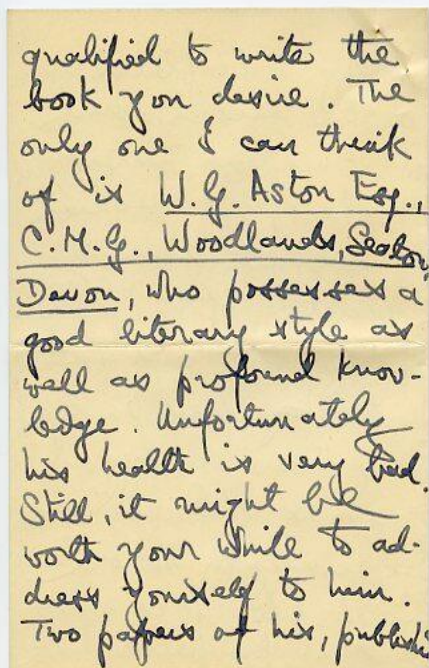
# チェンバレンからゴッス宛の手紙(1895年8月20日)



Miyazaki, Japan.  
20<sup>th</sup> August, 1895.

Dear Sir,

It would have given me great pleasure to accede to your request to write a short history of Japanese literature; but the state of my eyes is such as to prevent me from working more than a



qualified to write the book you desire. The only one I can think of is W. G. Aston Esq., C.M.G., Woodlands, Seaton, Devon, who possesses a good literary style as well as profound knowledge. Unfortunately his health is very bad. Still, it might be worth your while to address yourself to him. Two papers of his, published

It would have given me great pleasure to accede to your request to write a short history of Japanese literature, but the state of my eyes is such as to prevent me from looking more than a short time each day ..... It is a pity that so few persons are qualified to write the book you desire. The only one I can think of is W. G. Asto Esq. C.M.G., Woodlands, Seaton, Devon, who possesses a good literary style as well as professional knowledge.

# Aston's Source Books(アストンの種本?)

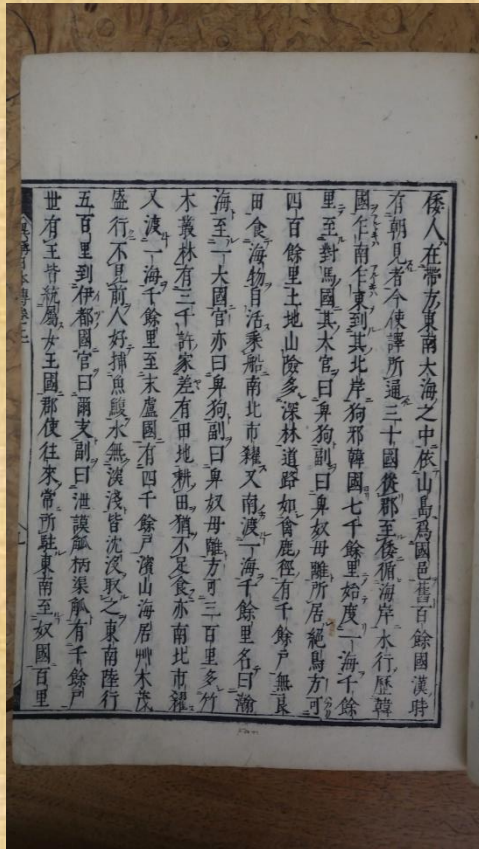
- 'Early Japanese History' (「日本上古史」): 『異称日本伝』(松下見林)
- *Nihongi; Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D. 697* (『日本紀』): 『書紀集解』(河村秀根)
- *A History of Japanese Literature* (『日本文学史』): 『日本文学史』(三上参次、高津鍬三郎)

# 『異称日本伝』(Isho Nihon den)

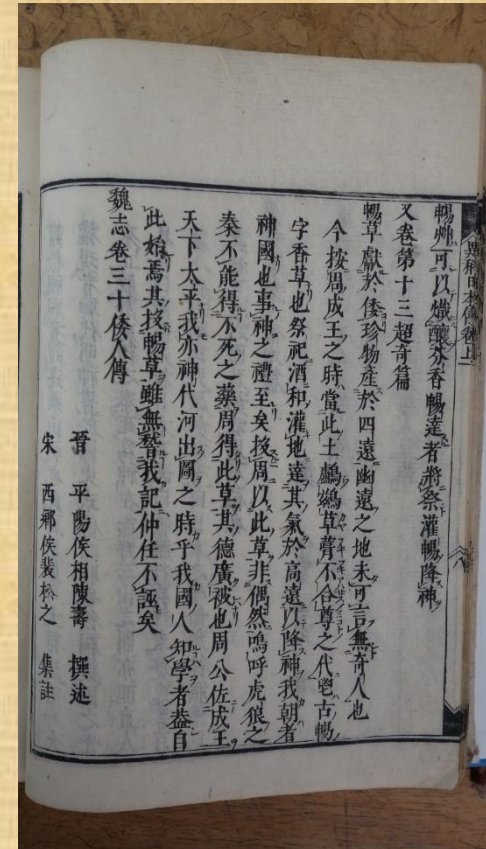
松下見林(Matsushita Kenrin)(1637-1703)

cf. 契沖(1640-1701),新井白石(1657-1725)

## 倭人伝の最初の部分



## 魏志卷三十倭人伝





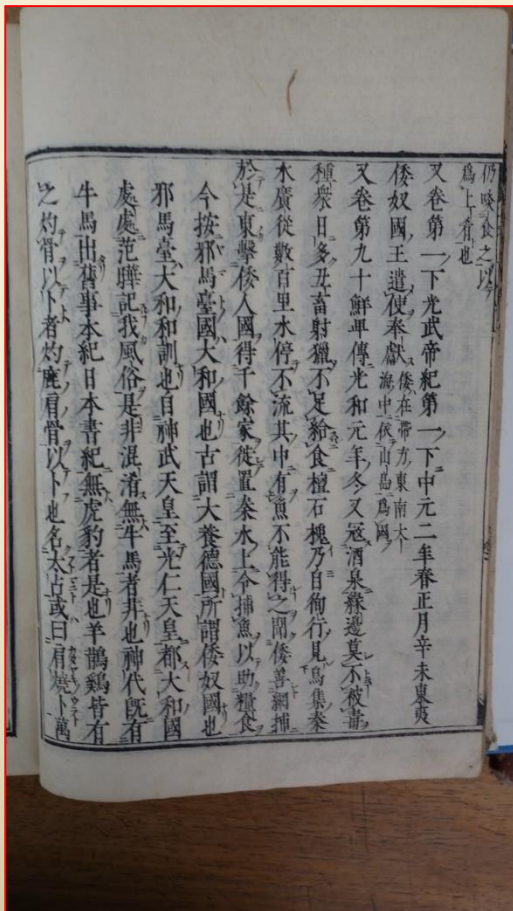
# 『異称日本伝』(Isho Nihon den) 松下見林(Matsushita Kenrin)

- 『日本書紀』の紀年  
(松下見林:肯定、アストン:否定)
- 邪馬台国=大和国  
(松下見林:肯定、アストン:肯定)
- 卑弥呼=神功皇后  
(松下見林:肯定、アストン:肯定)

# 『異称日本伝』(Isho Nihon den) 松下見林(Matsushita Kenrin)

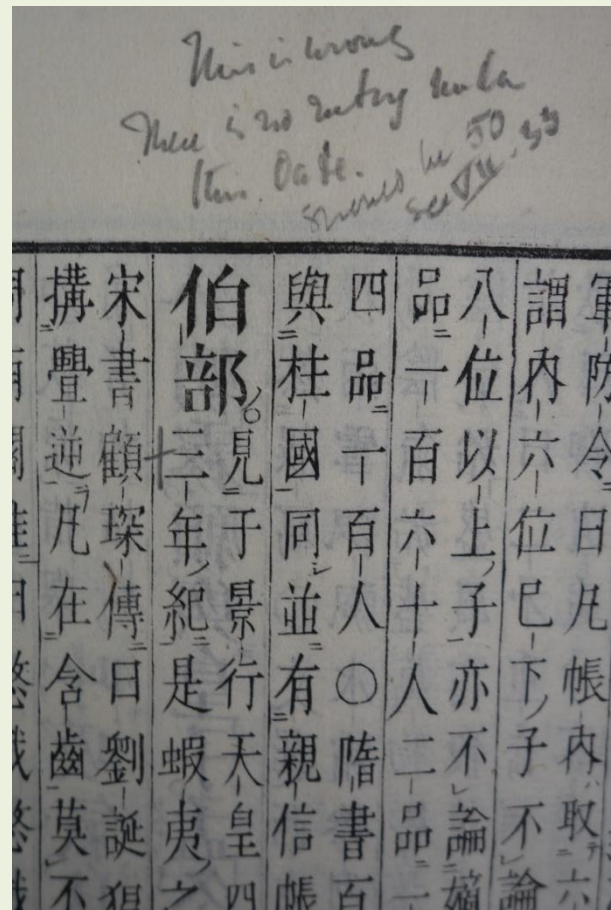
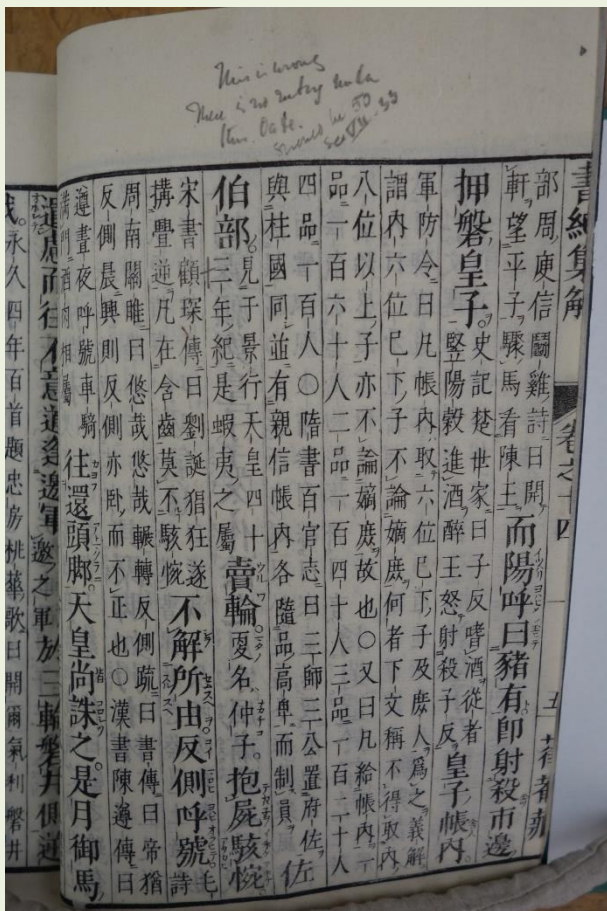
邪馬台国 = 大和国

卑弥呼 = 神功皇后



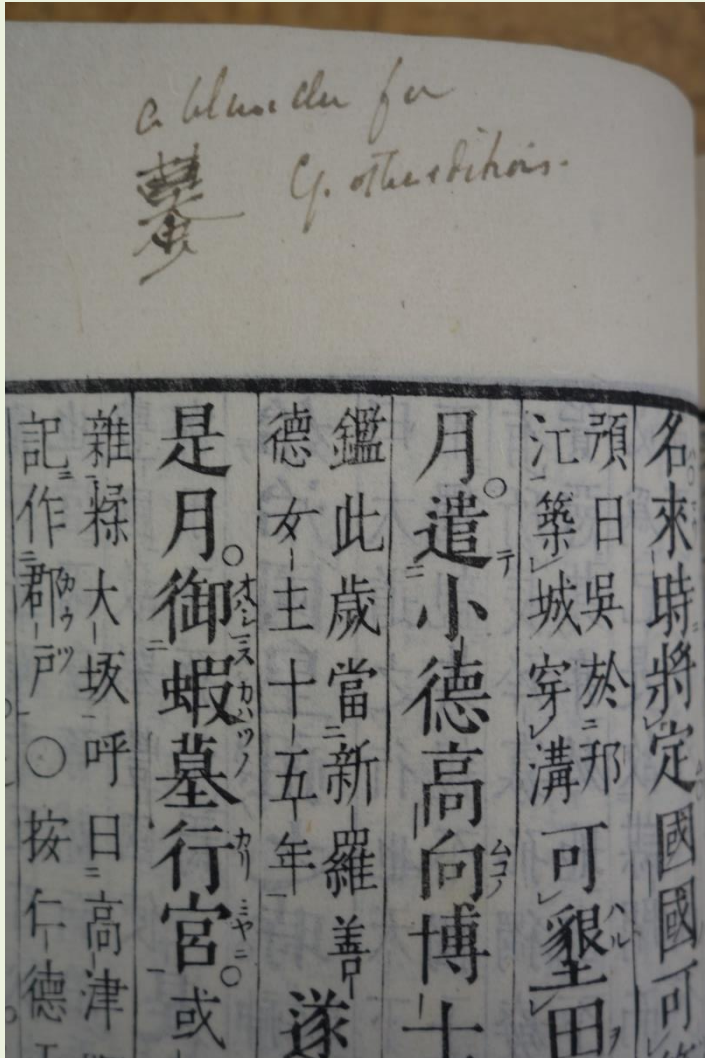
# 河村秀根『書紀集解』(アストンの書入)

## 河村秀根(1723-1792)





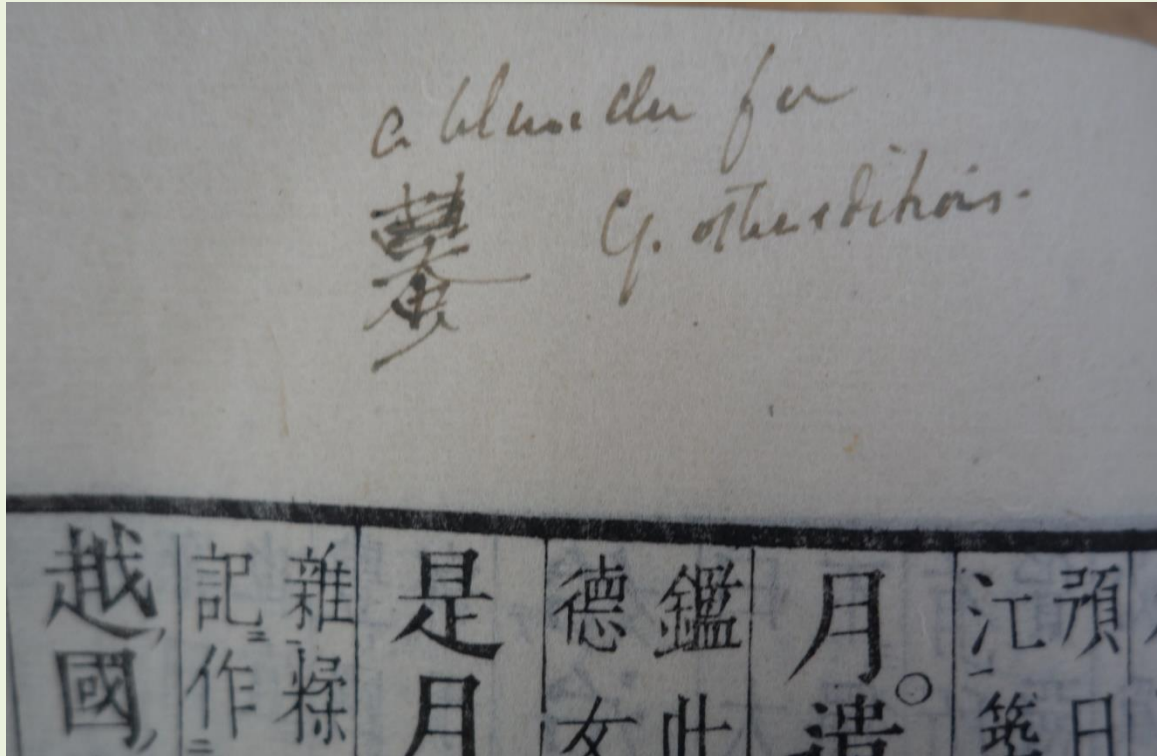
# 河村秀根『書紀集解』(アストンの書入)



## 第25卷(孝徳天皇紀)

是月、〔天皇〕蝦墓(かわず)の行宮(かりみや)におわします。

# 河村秀根『書紀集解』(アストンの書入)



A close cha[racter] for  
墓 cf. other editions

# かはづ(地名、高津?)

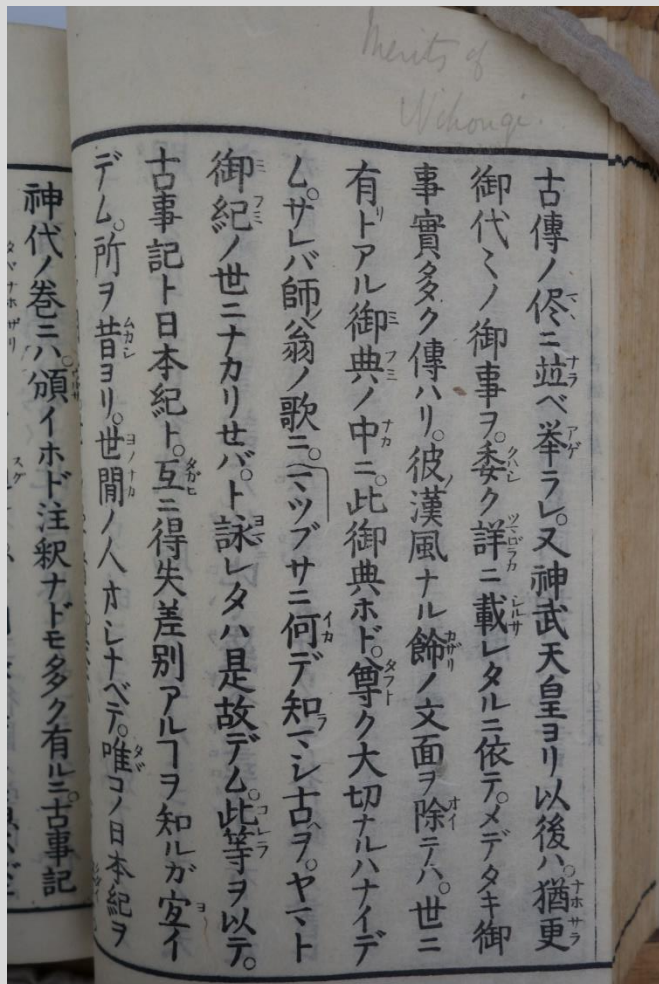
かはづ = **frog, toad**

蝦蟇(かわず)

蟄(かわず、ひきがえる)

**In this month, the Emperor occupied the temporary Palace of Kahadzu.**

# 平田篤胤『古道大意』(アストンの書込) “Merits of Nihongi”



彼漢風ナル飾ノ文面ヲ除テハ、世ニ有トアル御典ノ中ニ、此御典ホド尊ク大切ナルハナイデム(ござる)。

Hirata says “if we put aside the ornaments of style of Chinese fashion, there is none among all the writings in the world so noble and important as this classic” (Aston’s *Nihongi* 『日本紀』)

# サトウとアストンの神道・国学研究

## サトウ

- \* 主に日本で研究した
- \* 1870-80年代
- \* 日本人の先生(平田派)  
がいた
- \* 平田篤胤、本居宣長

## アストン

- \* 主に英国で研究した(日本での研究を継続)
- \* 1890-1900年代
- \* 特に日本人の先生はいなかったか?(サトウやチェンバレンの著作が先生?)
- \* 平田篤胤、本居宣長、「河村秀根、谷川士清」(松下見林?)

# **George Sansom's View About Aston**

(Address delivered by Sanson at SOAS in 1956)

**Aston had hardly any aids to study. He started from scratch, so to speak. He had to write his own grammar, to work out his own chronology of Japanese history, to deeply and widely in Japanese literature without the benefit of translation or commentary. He devoted great analytical power to the study of early Japanese religion and he translated with valuable critical notes the greatest of the Japanese chronicles, the Nihongi.**



# **New Resources for Japanese Studies (Digital Age)**

**The Digital Revolution may revive the study of early Japanese books. With the help of the internet, they may become important resources for Japanese studies once again.**